



# 園のくらしを育む9

## 日本の保育文化(3) — 鬼遊び —

秋田喜代美

### 1 発展する鬼遊び

鬼ごっこは、どの園でも子どもたちの中で幼児期に必ず行われる遊びの一つといえるでしょう。加古里子先生<sup>注</sup>が、鬼遊びには数千にも及ぶ変種があり、基本形で約500、さらにその異種も入れれば2000以上となるといっておられます。さまざまな年齢の子どもが群れて遊ぶことのできるこの遊びがどのように伝承形成され、自分たちのものになって遊びこまれていくのかを見ると、園の保育の中での遊びを深めて行くプロセスも見えてくるように思いながら、いろいろな園での鬼ごっこの様子を見せていただいています。

ある都心の公立園で保育を見せていただく機会をもらいました。そこでは小学校との共通の校庭はありますが、園庭は狭い限られたスペースしかありません。十時二十分からの中休みや昼休みに小学生が校庭にでくると、園児は潮が引いたように一斉に室内に入る



状況が生まれています。すべての部分が小学生や学童クラブとの共有スペースになっている中では、なかなか自分たちの遊びの足跡を戸外環境の中に残すのが難しい状況があります。その中で、どのように子どもたちに一定の運動量を保障した遊びを経験してもらうのか、保育者の先生方はそのために環境や活動において意図的にいろいろな工夫をされています。

七月の初めごろ、ピロティに二枚のマットがやや斜め位置に置かれ、四歳児クラスの子どもが十三名ほどで助け鬼をしていました。狼と子豚に分かれての助け鬼です。担任の先生にうかがうと、これは三歳の時の狼と子豚のお芝居のごっこ遊びから始まり、それが追いかけてここに発展し、また烏鬼の経験から助け鬼へと発展してきたとのことでした。一斉に一つの鬼遊びのルールを教師が伝えて、学級全体でやっていく園や遊びもあります。それに対してこの遊びでは、劇遊びなど子どもがある役になりながら、そこから鬼遊びになっ

ていっているのです。前に見たある園ではトロール遊びから鬼ごっこになっ

ていました。ごっこ遊びから鬼遊びへとという流れが、三歳の終わりから四歳ごろの子どもには見られます。遊びの世界の中で役になりきりながら「追う―追われる関係」を作り出すことで、計画的な運動活動としての鬼遊びとは一味違う、追うことが意味をもった遊びとしての鬼遊びになっていることがわかります。

見せてもらった鬼遊びでは、追いかけてつかまるのは嫌なので、鬼の狼役になる子





の数のほうが多く、子豚のなり手が少ない鬼遊びをしていました。そうすると、すぐに子豚がつかまり遊びが終わってしまうことに気づきます。それではおもしろくありません。そこで、狼役から子豚役に代わってもよいという子が少しずつでできます。自分を調整し全体を見ながらやっていく姿への育ちが、こうした行為の中に見られます。

元気に仲間を助けに陣地から飛び出して走っていく子どもがいる一方で、つかまるのが怖いので、十秒以上陣地にはいけないことがわかっていても、ちょっとだけ出てはまたすぐ戻ること繰り返している子ども、狼役になっても子豚に襲いかかってじゃれあう一対一のスキンシップだけが楽しくて、キヤーキヤーはしゃぎながらそれだけを繰り返している子、敵の動きをよく見て、真つすぐだけではなく横に走るなど相手の心や動きを読んで動ける子、ピロティにある柱で先方から見えない場所をうまく活用して走り出そうと考えるなど遊びの場をその遊びに合わせて活用して動ける子など、それぞれの子がその性格や発達に応じた動きをしていることがよく見えてきます。と同時に、鬼遊びの世界を共有して、それぞれに動きは違っても一緒にやっていることに満足していることが伝わってきます。もちろん、五歳になればそこからさらに陣地の数や距離、大きさ、参加する人の数、遊びの場の障害物など、さまざまな条件を自分たちで考えながら、より工夫した鬼遊びへと高めていくこともできます。だからこそ男女の性を問わず創意工夫が生まれ、誰もが深くのめりこめる本当の遊びになっていくのだと思われれます。



## 2 はみだしの遊び

加古先生は鬼遊びに、騒ぎ立てる遊び、智慧と工夫を注ぐ遊びという特徴と共に「はみだしの遊び」ということを指摘されています。ワーワー、キヤーキヤー、ドタバタ言いながらも、自分より小さい子や弱い子に対してはきちんとある救済措置をいれたり、配慮をして子どもは動いています。日ごろの遊びの中では友達となかなかうまくつなげれないAちゃんがその遊びの輪の中にいました。その子に対しては足の早いSちゃんはちゃんと力加減をしながら「逃げな」とか、ルールを説明しつつかわっています。また抱き付きふざけているM君も幼いのでみんなから大目にみられています。このようにして、他者のありようを受け入れる子ども同士の配慮が身体動作を通してながら生まれていること、相手の呼吸や動きを察しながら自分が動くという関係性は、追われ追いかける鬼遊びの中で生まれていく、見えにくいけれども大事な側面だと感じました。園外で群れることが少なくなつた現代だからこそ、さまざまな複雑性を備えた鬼遊びを幼児期に園で伝承していくことが求められているのではないのでしょうか。

(東京大学大学院教授)

### 注(参考文献)

加古里子『伝承遊び考3 鬼あそび考』小峰書店 二〇〇八年